

随想

生涯

——我が思想史——

Siveeayah 著

序 叙

我が血は蝦夷の族なり。曾祖父は秋田に生を受く。海を越へ、北海道、樺太へも涉りぬ。事業興し自由なる北の海を翔るも早逝す。我空想せむ、夢半ばに最果ての地に永眠しぬる壮者を。曾祖母辛苦し、祖父及びその兄妹らを育てぬ。猿朱別とふに住まひけり。今その名は残らず。野良犬のやう、極熊頻りにありしとぞ聞く。柱なるべき主いなくば庄屋に悪しざまにせらえけるらし。我が祖父は村の若きを組みて抗すも、終に追はゆる身なりけり。数年、東京、横浜をさまよひき。歳二十三、一篇の小説を彫琢し、『文学評論』に発表せり。昭和十一年なりけり。その後、戦時は公表まなならず、戦後二十余篇を遺す。時代の遷移に苦闘しつつ病に斃れぬ。享年四十八。我が父は横浜に生まれ、戦後渾沌たる渦のさなか、幼きより働き、刻苦勉励せり。夜学の高校卒業せし後は、勤め人たりしときも求道の気骨絶やさず、新しき知識を求め、亦た祖父の筆の跡を掘り出だし、子らに薰陶を継ぐ。

齡 零

莫し。零也。え覺へざる爾焉か。

齡 参

本の見返し、縁に添うて延々鉄道路線を描き佚。時の隔たり移るふ、處の違ひ変はる、いとをかし。倦む事なし。石鯀を愛しおはその丸み帯びたる四角なるゆゑ。四角を至聖究極とぞ想ふ。ゆるみ知らず。そのあつみ、強き存在性、存在の鮮烈、清冽、睿らかなる直の正しさなど心愉します。

齡伍

宇宙際なしとぞ聞く。欲い。無際限をぞえ想ひ泛べらえず。しかれども限りなきを超える立方体（石罅）をぞ焦念す。廻ち試みて時に成す。陶酔、世の常ならず。

齡七

大爆裂を想起するが最大なる意義光燦明晰清快樂なり。能う限り巨大なる炸裂を喚起し狂操するも、頂上達く焦燥すなり。

齡九

テストはいかなるテストにありても五分にて終はらせ、余りし時間はテスト用紙の裏の白紙部分に間隙なく漫画を描きぬ。それゆゑテストを大いに好み、点数の悪しきを氣に病むことも終なき。成績悪しきをゆゑとして学校を嫌ふ奴們らの心ぞ解さざる。学校は創りし作のためにありし発表の場にしあれば。級友に揶揄誹謗せらえしこともなく、たとえあるとても終に知らざらむや。

齡拾

龜を主人公にせし漫画を創り描く。

最も長く続けるキャラクターにて、友らにも最も興ぜられき（かと思ふ）。

制作時間は主に授業のさなか。小学校低学年より四年生に至るまで、全く教科書もノートも開かざる子なりけり。四年生なりし頃、毎日無地のノートを学校に持ち、授業も知らず漫画描きし。かくて教科書なぞ開かず、ノートも一文字も書かず、後にいかにして高等学校へ進めたか摩訶不思議なむや。休み

時間或いは昼休みなどに書けばと思ふかも知れぬとも、休み時間等は友らに作品を読み聞かす時間ゆゑ、さやうなるわけに行かざりき。

当時、担任は完全に諦めにけるらし。よく思ひ起こし厳密に言ふならばキャラを創りしは小学校二年生なるかも知れずも、日々書きて日々発表せしは小学四年の頃に相違なきと思ふ。

齡拾七

『空』とい言葉を知る。際なき最大の強裂炸を覚ゆ。天へと昂る心地せり。崇高の情、高き天蒼穹を翔け、之を言ひ曰ふ言の葉なく舌縛るる。

初めに書きし小説は推理小説なりき。事件の内容は、白昼の街、衆人環視の中、被害者が突然焼死せるなりとい物語なりけり。不思議なるはその場に火の氣は露ほどもなく、実にビルの上より巨大なるレンズを用ひて焦がしたりけりといふ到底有り得べからざるトリックなりけり。小学五年生と言へども、いかにや、とぞ想ほゆ内容なりけり。

主人公、シャーロック・ホームズ及びアルセーヌ・ルパンより頭脳明晰研究心旺盛鋭き直感を持つといふ超々天才名探偵等といふ設定なりけり。

究極好きなる我なりき。

齡拾八

友達数名と漫画研究会、いはゆる「漫研」を作りき。セルにセル画を描くなどしけり。絵真など友人の従兄弟が手塚治虫より頂戴せし残滓とかやいふ品（真や否や今は定かならざりき）にて、ジャムの壺のやうなりしガラスの壺に入りてありき。何とぞ本物らしき見映ありけり。飽くまで記憶上なりせども。

齡 拾四

十四歳といふ齡は前の世紀末來、繁く取沙汰さるる齡、我が事に於いても異に非ず、狂焦俵借なき過剰なる矯激、超越の上も過剰なる超越、狂おしき焦燥自裂、永劫無限 **Engage** 奏で自己破碎的なる、蒼穹的自由自在を求めたりき。

【中学一年生までは成績が良かった（と想うが、記憶違いの可能性もあり。人間は皆自分に都合の良いように記憶を残すものである）が、二年生以降は勉強に興味を失って成績が落ちた。学校で行う様々な行事やイベントでは寸劇や出し物の脚本・監督・主役を自薦で兼ねて半ば強引に行った。学校における委員会活動では、保健委員会を二年連続でやって、保健だよりを発行した。『おならの特集』とかやったのを覚えている。同じ委員会を二年連続は原則禁止だったが、保健委員会が気に入っていたのでちやっかり二年連続やった。最後は卒業アルバム作成委員会委員長をやった。ざっくりでめざましかった。授業中に突然、「先生の授業は面白くないので僕が授業をします」と言って、当時のアイドル・グループだったキャンディーズについて講義をした。卒業生を送る予餞会では脚本・監督・主役を兼ねた。そう言えば、2作目の小説を書いたのがこの年だった。その前にも書いていたが論文みたいでまともじゃなかった。中二の夏に宿題として原稿用紙25枚に書いた。『未完成』というタイトルで、難儀して未完成だったのでそういうタイトルにした。内容は、運命の一日惚れた恋愛の物語で主人公は十四歳で最後に自殺する、というものであった。その他窮極の真理・芸術を構築しようと焦燥する夏が過ぎて逝き、空転する。空と言えはその頂上に『空』には飽いていた。それを超える何かを探して息が詰まりそうなきささに堪えた】

逝きし日と思ひ出しつ再構築せば、すなはちより大きくより強くより烈しく凄まじき炸裂を求め、最も巨魁なるを、激烈なるを、超速なるを、最強を、最睿断を、最も **vivid**、最も **real**、最奥義最眞實性なる最鮮烈の究竟を求めし、際限なき巨大を超へる巨大を、際なき宇宙を越へる最烈炸を、無限の強を超へる強を、無限に聳へるを凌駕せる至高を、無限なる蒼穹を超える蒼穹の涯を越へ、究極を

超へるをぞ欲望す。

清き夜の天穹、見ゆるは真砂なす数億年前の光なり。光さへ数億の歳月を要すとい隔たりとはいかばかりかと想ふも想ひ至らず。心無限の翼とぞ言へども及ばじ。

又土を握れよ。この掌に幾兆の素粒子あるや、電子原子核数知らず。全宇宙は言はずも。これら膨大複雑精緻細密捉へ難く得難きなり。捉へられず脳裂、世は凄絶なるオルギア、狂裂は際なくば、ただ日常事にしかず、解放free囚はれず、破天荒無際限超なりし無際限を超ゆる天衣無縫の究竟涅槃を超越す最睿晰強巨狂裂炸爆也。人知らず。曰く、

どうでも

(大義)

「どうでもよい。構いやしない」の義。「どうでもよくない・どうでもわるい」をも含有せるがゆゑ、「よい」を省きて「どうでも」とす。かたがたき事、縛りも歯止めもなく、無際限、全肯定、龍背(龍のごとく肯んず、人間的なるを超越する非地上的な肯定)、森羅万象・何も彼も・あらゆるすべてなりし事、萬凡汎般全、自由自在無碍、とてもかくても候(どうあっても覚じゆうぞいすす)、遺漏なく全網羅、完美完璧、天衣無縫の荒御魂なる事。

之を甚深に夢想し、超越の陶醉をせり。迺ち是、藝術と云ふ、静謐寂滅なる

廣大無辺の陶醉なり。

齡拾六

時止まりたるを覺へし。フリードリヒ・ニーチエの著せる『善惡の彼岸』を読みしさなか、髯と見違れば一切止まりてありき。

齡拾七

さりとても我們、星燦の何たるを知るや。知らず。知らずとはいかなる境涯きやうがいや。真実を求めて得ず。抑々烏真実乎。知らずさへ得ず。只管ひたすら在るが俚也。いかに非ず。萬 *quors*・汎般・無際限解放 *free*・不得捉・不能着地・未遂不收。これを「非」文字にいふ。生涯之に尽き焉。既に晩秋。曰く、

(補足解説)

非故、非にさへ非ざるを、理によりて約めれば「非ず、にも」といふ倒置文なるべし。原蛇ウロ

ボロス *ourobomos* 『己の尾を嚙む蛇』なる自家撞着文なり。「非ず、に」といふも同じ。

畢竟、日常茶飯の粗雑器に異ならず。喫茶去。身も裂き砕き天翔け躍る天衣無縫の荒御魂也。

以て我が生涯の究竟涅槃とす。人生完^{まつた}し。龍肯義哉。

至高藝術義全 無闕遺焉

完